

目次

萩原井泉水	1
巖谷小波	1
中村草田男	2
水原秋桜子	2
秋元不死男	3
鷹羽守行	4
清崎敏郎	4
原コウ子	5
長谷川かな女	6
加藤知世子	6
岡部六弥太	7
福田夢汀	8
皆吉爽雨	8
三浦木二	9
尾崎放哉	9
加藤かけい	10
内藤吐天	10
幸田露伴	10
与謝野晶子	11
与謝野寛	12

鹿兒島壽蔵	14
山口茂吉	15
土田耕平	16
佐藤佐太郎	17
土岐哀果	17
木俣修	18
生田蝶介	18
中原綾子	21
村山槐多	21
加藤洵綾	22
依田秋圃	23
松田常憲	23
中野菊夫	24
中村九一	24
富永貢	24
宮沢賢治	25
西条八十	27
大木惇夫	33
北原白秋	35
川路柳紅	36
あとがき	37

萩原井泉水

(1884~19

76) 明治・大正・

昭和期の俳人。1

919年1月来島。

萩原井泉水

岡田村といふ大島の北端にしてきわめての寒村
なれども椿の花美しと聞き、其の花は随所に

咲きこぼれり

巖谷小波

(1870~19

33)

明治・大正期の小

説家、童話作家、

俳人。1920年

3月訪島。元村の

俳句結社「櫻社」

の選者でもあつた。

巖谷小波

- 1 まこと椿と牛乳が濃く我が来し島
- 2 椿山よりかへりみる今は海の風ぎやう
- 3 椿の路の目白捕る子が先に行くばかり

(句集「流転しつづ」より)

- 1 髪の主ローマンスの主島椿
- 2 踏みなやむ牛の蹄や落椿

中村草田男

(1901~19

83) 昭和期の俳人
1938年8月来島

3 旅人の名を刻まれつ大椿

(俳誌「木大刀」1920年4月号より)

中村草田男

- 1 木漏れ日は椿の幹に白く激し
- 2 合歓は醒めず椿茂りのしずかさに
- 3 なめくじり蝸牛花なき椿親し
- 4 椿茂る二里の闇路へ別れかな

(句集「火の島」より)

水原秋桜子

(1892~19

81) 大正・昭和期の俳人

水原秋桜子

- 1 椿咲き埠頭突き入る涛の中
- 2 迅雷や炎ひるまぬ椿炭

迅雷=激しい雷鳴

秋元不死男

(1908〜19

77)昭和期の俳

人。大島には19

35年、1955

年、1969年の

三回訪れている。

- 3 伊豆の海の大島椿ここに匂ふ
- 4 一枝挿す大島椿花数多
- 5 花つぼの椿の春の幾日経し
- 6 潮風にいたみし椿まづ落ちて
- 7 花壺の椿悉く落ち敷きぬ

(句集「晩華」「秋苑」より)

秋元不死男

- 1 骨折や火山の彫りを椿越し
- 2 火の山の火を見ずかへる山椿
- 3 椿充つ金齒は褪せず女の午後
- 4 桶に浮く椿を掬ひ流人めく

拈華^{けんげ}花をつまむ。
鷹羽守行

(1930)

現代俳人。この句は、句集「平遠」
収められ、昭和4
5年の部にある。

清崎敏郎

(1922〜19

99) 昭和期の俳
人。大島には、1
958年、84年、
87年の三回訪れ
ている。

四通八達^{しつうはつたつ}道路が
各方面に通じてい
る。

5 受洗後のさま全容の落椿

6 拈華^{けんげ}すれば馬は小走る紅椿

(俳誌「氷海」1955年3月、5月号「天狼」
1970年4月号より)

鷹羽守行

1 鴉^{からす}には四通八達^{しつうはつたつ}椿林

2 落椿もみあふ最終便の水脈^{みづな}

(句集「平遠」より)

清崎敏郎

1 さしこめる日か落椿浮き立たす

こゝたく響けし
||こゝたく||に同
じ。こんなになく
さん。

原コウ子(189
6年~1988)
大正・昭和期の俳
人。1971年来
島。

- 2 根上がりの椿は樹齡二百年
 - 3 落椿浮き足立てる大地かな
 - 4 落椿ここたくあれば仰ぎもし
 - 5 咲けて来し椿の森の暗さかな
 - 6 道広く椿大樹を連ねたり
 - 7 ユーカリの一本抽んで椿園
- (「若葉勉強会大島吟行特集」1984年、1987年より)

原コウ子

- 1 巖層や椿はいのち炎とつづり
- 2 島に老ゆ駱駝に椿けうときよ
- 3 春雪の深雪を払ふ紅椿

長谷川かな女（1887～1969）
大正・昭和期の俳人。1931年2月来島。

4 羊齒老いて主の如しや椿島

（俳誌「鹿火屋」1971年5・6合併号より）

長谷川かな女

1 熔岩に椿の林途切れけり

（句集「雨月」より）

加藤知世子

（1909～1986）

昭和期の俳人。1960年2月都庁俳句仲間と来島。

加藤知世子

1 月と椿の静炎怒濤の中を航く

2 椿落花の日の斑うたがふ狐の眼

（句集「朱鷺」より）

岡部六弥太

(1926年)

現代俳人。197

1年来島。三浦木

二(1885)1

971。本名三浦

伊八郎。著名な俳

研究家)

華鬘は仏堂の荘嚴

具。ここでは組み

ひものひとつのケ

マン結びのこと。



まん
け

岡部六弥太

- 1 子に椿咲き父の舟待つところ
- 2 椿梢継ぎ夜話の噴火歴
- 3 雉子哀れ流罪の少女椿となる
- 4 恋孔雀啼けば水輪に椿泛く
- 5 恋孔雀椿の森の日箭(矢)に歩す
- 6 鴨啼くや為朝椿日得て寂
- 7 椿恋し生涯水壺を頭に老いて
- 8 児に華鬘編まな椿の島に来て

(句集「土漠」より)

福田夢江

(1905~19

88) 昭和期の俳

人。1974年1

月来島

福田夢江

1 全島の椿咲くまま落つるまま

2 椿照り群島海の紺に消ゆ

3 崖椿がけつばき地層にまざと火山歴

5 山椿黑白相似の親子牛

6 頭殿を穂屋ほぐに祀まつれり島椿

(句集「巖」いわより)

皆吉爽雨

(1902~19

83) 昭和期の俳

人。1932年来

島

皆吉爽雨

1 登山驢馬きてゐる門の椿かな

2 噴煙のほふ椿の茶店かな

(句集「雪解」より)

三浦木二

(1885)1

971、本名伊八郎。著名な椿研究者・俳人。

三浦木二

- 1 野も山も椿ばかりや島の春
- 2 春寒し炉に焚くものに椿ツバキ
- 3 椿咲く大島にして春の雪
- 4 椿林中に一樹の梅匂ふ
- 5 寒椿一樹を植えて黒潮寮
- 6 風塵の中によごれて寒椿

(「椿春秋」より)

尾崎放哉

(1885)1

926)大正期の俳人。

尾崎放哉

椿咲く島の火山の日和かな

(「尾崎放哉全句集」より)

加藤かけい

(1900)~19

83) 昭和期の俳

人。1937年来

島。

内藤吐天

(1900)~19

76) 昭和期の俳

人。1928年12

月来島。

幸田露伴

(1867)~19

47) 作家・評論

家・随筆家。19

12年1月来島。

紀行文に「世目の

大島」あり。

加藤かけい

1 この火口荒磯の椿汝を投げよ

(句集「浄瑠璃寺」より)

内藤吐天

1 島ぶりの娘が髪や冬椿

2 船立ちしあとの暖雨や冬椿

(句集「落葉松」より)

幸田露伴

1 磯山の椿のかけに歌の声ゆるく流るる島

うなみ子に髪をう
ない(子)しもの髪
をうなみ子(うな)と
にした子(うな)も

与謝野晶子

(1878-1919)

42 明治・大正・
昭和期の歌人・詩
人・評論家、大島
には、1903年、
38年の一回訪れ
ている。

の春の日

2 うなみ子が椿の花をぬく糸の長々し日の
春の静けさ

3 燃ゆる火の山のふもとぢ燃ゆる火の色に
咲きたる大島椿

(「蝸牛庵歌文」より)

与謝野晶子

1 火の中に三原の神はいませるや椿の花と
なりていますや

2 水桶を少女いただき鈴かけて驢馬行く島
の常春椿

みはやすい見ても
てはやす、ほめる

3 元村の秋の椿の初花のうすきと濃きを見
はやすわれも
4 元村の椿の油目に清しあきなひたるも髪
に光るも

与謝野 寛

(1873~19

35) 明治・大正
期の歌人・詩人

米島は、晶子と同
じ。

与謝野 寛

1 島の山驢に乗り行けば肩に触る榛はりの若葉
と椿と桜
2 島に来て今日思ふかな我歌も椿油もみづ
から搾る
3 島の山わが凭もよる岩も驢をつなぐ蔭も椿の
花の木のもと

4 島に見る椿油の搾木さへ心の外のものな
らぬかな

5 驢に乗れる四人動きて路は出づ椿の山と
青海のうへ

6 海ごしに富士と天城の山を据え我を繞る^{めぐ}
は椿の木末

7 下りし里さくらと椿森を成し小鳥の鳴け
ば火口を忘る

8 島の路ほのかに羞づる思ひあり椿とさく
ら歩ごとに覗く

9 麓なる椿の花を滴る雨も三原の雲の夜明
けのしづく

10 水瓶を頭に載する島をとめ我が見送れば

鹿兒島壽藏

(1898~19

82) 紙型人形作

家・歌人。196

3年、1974年

の二回訪島 弘法

浜の土田耕平歌碑

を揮毫

なづみこしりはか

ばしく進まないで

来た。

冬され草木が枯

れはてものさびし

いようす。冬真つ

最中。

椿の隔つ

11 おち椿手に採りてみることもせず島こと
ごとくその花なれば

12 行く方に小雨を侘びず島の路椿と桜廊を
つくれり

(以上「冬柏」1938年10月号より)

鹿兒島壽藏

1 幾時か脚なづみこし砂漠尽き笑み残り
る椿に寄りぬ

2 青踏みて踊れるありフェンシングせるあ
り椿の庄のキャンプ場

山口茂吉

(1902~19

58) 歌人。斉藤

茂吉の助手として

有名 1937年

来島

3 この島の夜明けに
いまだ間のありて
椿の園は暗く音せず
4 冬ざれの渚べ
ひろく光差し
椿うながす
大うみのかぜ

(歌集「花白波」「とよたま」より)

山口茂吉

1 磯山の椿の林は
るのひはしろが
ねいろに照りてし
づめり
2 おどろきの声
をあげたり
照りひかる
椿の樹海目
のもとに見て

(歌集「赤土」より)

土田耕平（1895～1940）

5（1940）

大正・昭和期の歌人。1915年から1921年まで大島で療養生活を送る。この間詠った歌が数集「青杉」に収められた。

土田耕平

- 1 咲きそめて幾日も経ぬに丹椿の花は木下に散りしきて見ゆ
- 2 風しげく椿の藪を吹き揺する葉がくれの花葉おもての花
- 3 庭土の上に落ちつつたまりたる椿の花のくれなる褪せぬ
- 4 ゆくりなくわれ来にけらし山の上の道なだらにて椿落ちる

ゆくりなく「思いがけなく、不意に。」

（歌集「青杉」より）

佐藤佐太郎（19

09～1987）

昭和期の歌人。

1937年来島。

垣内＝垣根の中。

屋敷の中。

佐藤佐太郎

1 垣内にて椿の油搾りをりまれに滴るは静
かなるもの

2 砂畑に椿の若木たちしかば午後の光に葉
は照りにけり

（歌集「歩道」より）

土岐哀果

土岐哀果
（1885～19

80）明治・大正・

昭和期の歌人、国

文学者、本名益藤。

1915年来島。

1 けふもまた遂にかへりの船は来ずこの島
路のつつじと椿

（歌集「雑音の中」より）

木俣修 (1906)

(1983)

昭和期の歌人、国

文学者、1955

年2月来島

木俣 修

1 落花おちばなの椿ただよふ潮波入江は春の光あふ
れ
2 島丘の椿木がくれ短銃を帯ぶる巡査の
どかに歩む

(「木俣修全歌集」より)

生田蝶介

生田蝶介 (1888)

9(1976)

大正・昭和期の歌

人、小説家、19

33年1月来島

1 手しぼりの椿の油したたりてこがねと湧
くを立ちよりて見ゆ
2 椿咲く紅きは椿元村の花枝あんこの紅き

まさかり真つ盛
り。

くちびる

3 椿のまさかりなり雨の後はそのいろまこと
に燃ゆるばかりなり

4 あたかも椿のさかりにわが来つつ真ま紅あかき
花にしづくを仰ぐ

5 仰ぎつつゆくにつづける椿の花どこまで
咲ける椿の花ぞ

6 地を見れば地をうづめたる紅くれないの椿の花の
道のつづける

7 おほかたは島の椿は大木にて路の上に高
く落ちかかり咲く

8 大き椿雨後を重げに咲きさかりその紅花
は灯のごとし

まま「問々 時々、
夜さ」「夜さり」
で夜と同じ。
あへなし「どうし
ようもない。

- 9 落ちしつばきの紅の花片に乳汁をこぼし
て牛はゆくなり
- 10 やぶかげのくらさを抜くる牛の背におち
てころがる椿の紅さ
- 11 ひよどりのこえはままなり咲きさかる椿
の花を散らし飛びつつ
- 12 ひと夜さのあらししづまり明けゆく道ふ
みもあへなき落椿の花
- 13 どんとうつ浪をはるかにひとり聴く丘ふ
ところの椿かがやく

(「生田蝶介全歌集」より)

中原綾子（1898～1969）

昭和期の歌人、大

島には1932年

1月訪れる。

1月訪れる。

中原綾子

1 海ひろき椿の島に生ひ立ちて里人の眼の
美しきかな

2 工場の椿油がぼたぼたと落ちてきざめる
長閑なる時刻

3 牛の毛も椿の葉ほど艶ありて弥陀の滋眼
に眼は似たるかな

4 歌の茶屋椿の茶屋とよきほどのみやびが
ありて名づけたりけん

5 一月に椿咲けどもあやしまず所並にも狎
るる心よ

狎れる＝馴れるに
同じ。

（歌誌「いづかし」1932年2月号他より）

村山槐多 (1889

6~1919)

大正時代の洋画家。

1916年来島

村山槐多

1 椿の葉ざわめくばかり波立てる海の面の
深き緑よ
2 何しらずこのしずかさ
に打ひたり椿の葉
如輝き居らん

(「村山槐多全集」より)

加藤洵綾

加藤洵綾 (1901~1987)
日本画家・歌人。
大島には、1916年、27年、28年の三回訪れている。

1 庭椿の蔭の小瓶に小鳥らの水浴む見れば
うら安げなり
2 朝霧はこぼれ椿にまだ乾ねば日光したし

春されば春が来た
たら

き山の径かも
3 磯山に椿花咲く春されば汝が待つ家にま
たも来むかも

(歌集「霧苔」雑誌「美之園」より)

依田秋圃

(1885~19

43) 歌人・林務
官吏 1938年
来島

依田秋圃

1 冬いまだ椿は多に咲かねども木の間に見
えて海の眩しき

(歌集「形聲」より)

松田常憲

(1895~19

58) 大正・昭和
期の歌人 193
3年来島

松田常憲

1 ひたひたと岸にとどける朝の波椿あかる
き島につきたり
2 落ちたまる椿の花の色あたらし草鞋にふ
みて人ゆきにけり

(歌集「秋風抄」より)

中野菊夫

(1911~20

01) 昭和・平成

期の歌人。

中野菊夫

1 いのちあるもののごとし一輪の丹椿にっばきちり
て白き砂原

(歌集「丹青」より)

中村九一

(1900) 本誌

1938年来島

中村九一

1 秋深き山路にぬれてくれなゐの色照る花
は此の島椿

(歌集「湖邊の櫻」より)

富永貢

(1903~19

95) 昭和・平成

期の歌人。この歌

は歌集の「昭和32

年」の部に入っ

ている。

富永貢

1 島山は風なき道にただよひて椿の花の夜
もにほへり

(歌集「山の砂」より)

【詩 編】

宮沢賢治 (1896-1933)

大正・昭和期の詩人・童話作家

大島には1928年6月に訪れ、長

編詩「三原三部」を残す。

島わに「島回」が本来の表現。島の

まわり。

宮沢賢治

「島わにあらき潮騒を」

島わにあらき潮騒を

うつつの森のなかに聴き

羊歯の葉しげき下蔭に

青き椿の実をとりぬ

南の風のくるほしく

波のいぶきを吹き来れば

すだくし群がる

百千鳥すだきわぶる
三原の山に燃ゆる火の
なかばは雲に鎖とぎされぬ

「火の島の歌」

海鳴りの とどろく日は
郵船ゆうせんもより来ぬを
火の山の 燃え熾さかりて
雲の流るる
海鳴りよせ来る 椿の林に
ひねもす 百合掘り
今日もはてぬ

(以上「全集六卷」より)

西条八十

(1892~19

70) 大正・昭和

期の詩人。大島に

は16歳のときに訪

れ、以後何回とな

く来島。

立木菊枝(元町立

木摩之丈の娘。娘

茶屋で八十と逢う。

二十歳で他界。

西条八十

「哀歌」

「美しき島少女立木菊枝の死を悼みて」

赤き椿の

花ちりて

御神火さみし

美はしかり

かの瞳

波の音聴きつ

「美しき死」II

1933年2月12日に家蔵女子専門
学校生松本貴代子
が富田昌子を「自
殺案内人」に三原
山に投身自殺した
「事件」を題材に
した作品。31ペー
ジの三原山は黙
も同じ。

今年の夏も

都びと

浜辺の月に

うたふべし

南の海の

沖小島

われのみぞ知る

墓ひとつ

「美しき死」

(「少女倶楽部」1934年3月号より)

赤い椿も咲いています
海もみどりにゆれてます

南の海の沖小島

ここがわたしの眠り場所

わたしの位牌、三原山

山の煙よ さようなら。

優しき友を想ふとき

孤りの父を念ふとき

涙は袖をぬらせども

あこがれの死の美しさ

わたしの位牌、三原山

山の煙よ、さようなら

わたしの若い肉体は
汚れを知らぬ大理石
火口に燃える紅薔薇よ
優しくまもれ、永久に。

わたしの位牌、三原山
わたしの煙よ、さようなら
ふもとの驢馬の鈴の音を
最期の耳に聴きながら
胡蝶のやうに楽しげに
わたしは死んでゆく処女
わたしの位牌、三原山

山の煙よ、さようなら

「三原山哀歌」

夏の夕べの蛾のごとく
美しき死にあくがれて

火口に急ぐ乙女らは
いかなる夢を語りけん

伊豆の大島三原山
虎杖しげる岨路に
世に亡き母の幻も

描きたりけん、山の霧

「さらば」の声も朗らかに

姿は消えて、草履のみ

紅き椿の花のごと

涙にぬれて残されぬ

「わが永久の位牌ぞ」と、

君が語りし御神火の

煙は今日も青空に

揺れて奏づる薤路（露）行

（以上「婦人世界」1933年4月号より）

薤路（露）——世界中
国で葬送のときに
歌った歌

大木惇夫（1895～1977）

大正・昭和期の詩人。「婦人世界」

1933年四月号に掲載された。

おしろいやぶのこ
とだが、意が通じ
ない。ここでは
「おしろおしろ」
で「気味が悪い」
ほどの意だと思わ
れる。

大木惇夫

「三原山風景」

三原山、火を噴く山の
おどろにも何ぞ静けき
人の世に事しあるとも
熔け石はかかはりもなし
麓には紅椿咲き
牛の乳しぼる乙女の
唄かなし、南のしらべ
春日ざしうらうららに
真青なる空を仰げば

ゆうゆうと煙たなびき
瞰みおろ下せば、磯の岩根に
しろじろと波は散るなり

きのふかも、夜明けの霧に

風早の灯台を見て

あくがれの島に着きしに

そは夢か、はたやうつつか

けふはしも日は暮れおちて

はや遠し、驢馬の鈴音

沙漠には人影もなし

ただ一路、残る足あと

それさへも、風ふきたちて

北原白秋

(1885~19

42) 昭治・大正・

昭和期の詩人。

さうさうと消しもゆきけり
三原山、火を噴く山の
おどろにも何ぞ静けき

(「婦人世界」1933年4月号より)

北原白秋

「大島」

髪は背の丈、
油は椿、ヨ
いとしアンコは、サア。
島そだち。ヨ

川路柳虹

(1888~19

59) 明治・大正・

昭和期の詩人。

この作品について

は掲載誌を各頁、

不詳。

月の椿の、
花かげゆけば、ヨ
油搾木の、サア、
音ばかり。ヨ

(民謡集「日本の笛」より)

川路柳虹

「大島女」

乙女椿の咲く島に
南風みなみかぜが吹けば人恋
し

丈長髪に 黒髪に 帰しやしませぬ
胸のひに 胸のひに (「藤井清水作品集」より)

【あとがき】

大島の椿を詠んだ詩歌を「大島を詠った近現代詩歌人 作品集」（時得孝良編 私家版）から拾い上げ研究用に編んでみた。ここでは、ある程度名の通った詩歌人のものを載せたが、椿そのものを対象にして詠んだ作品は思ったほど多くはない。「椿」ということばを詠みこんだものが中心だが、何かの参考に活用して頂ければありがたい。

二〇一三年一月

東京都大島町岡田字笹郷 95

時得孝良

090・7428・7446